

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K20513

研究課題名(和文)持続可能な地域づくりに資する“思考の補助線”としての風土概念の有効性の検討

研究課題名(英文)Effectiveness of the concept of Fudo as a "supporting line of thought" for sustainable community development

研究代表者

太田 和彦(Ota, Kazuhiko)

南山大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：50782299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、以下の3つに代表される。(1)『環境倫理学』(2020)、『環境問題を「見える化」する』(2022)に寄稿した。環境倫理学の源流の一つである土地倫理と風土論との関連づけ、ならびに持続可能な地域づくりに資するルーブリックへの応用を行った。(2)学術誌『比較思想研究』に2本の論文を投稿した。和辻風土論とシュッツ(2019)、生の哲学(2020)との比較を通じて、「旅行者の体験における弁証法」の意義の刷新を行った。(3)IAJP等の国際会議で5回の研究報告を行った。風土論に関心を持つ国外の研究者との意見交換を通じて、食農倫理学、シリアスゲームと風土論の関連について知見を経た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

土壌保全、フードポリシー・カウンシルの設立準備などの分野横断的なプロジェクトに参加した申請者の経験とフィールドワーカーへの聞き取り調査、および国内外の文献調査に基づき、「旅行者の体験における弁証法」を基点として和辻風土論の意義付けを拡張したことの学術的意義は大きいといえる。制作したルーブリックは、沖縄で脆弱性の高い自然資源の利用に際しての順応的ガバナンスのためのワークショップで用いられる予定だったが、新型コロナウイルスの影響により中止された。しかし、NPOや行政職員なども多く参加した第4回アジア太平洋圏食農倫理会議(APSAFE2020)をオンラインで企画・運営したことの社会的意義は大きいといえる。

研究成果の概要(英文)：The results of this research are represented by the following three. (1) Contributions to "Environmental Ethics" (2020) and "Making Environmental Issues Visible" (2022). He related land ethics, one of the origins of environmental ethics, to Fudo (climate, milieu) theory and its application to rubrics that contribute to sustainable community development. (2) He contributed two articles to the journal "Comparative Thought Studies." Through a comparison of Watsuji Fudo theory with Schutz (2019) and Philosophy of Life (2020), he renewed the significance of the "dialectic in the traveler's experience." (3) He presented his research five times at international conferences such as IAJP. Through exchanging ideas with researchers outside Japan interested in climate theory, he gained knowledge on the relationship between food and agricultural ethics, serious games, and Fudo theory.

研究分野：環境倫理学、食農倫理学、風土論

キーワード：風土論 順応的ガバナンス 和辻哲郎 持続可能な社会への移行/転換 レジリエンス 環境倫理学 食農倫理学 ルーブリック

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

▼風土概念を「やっかいな問題」に取り組むための”思考の補助線”として位置づけ直す必要性

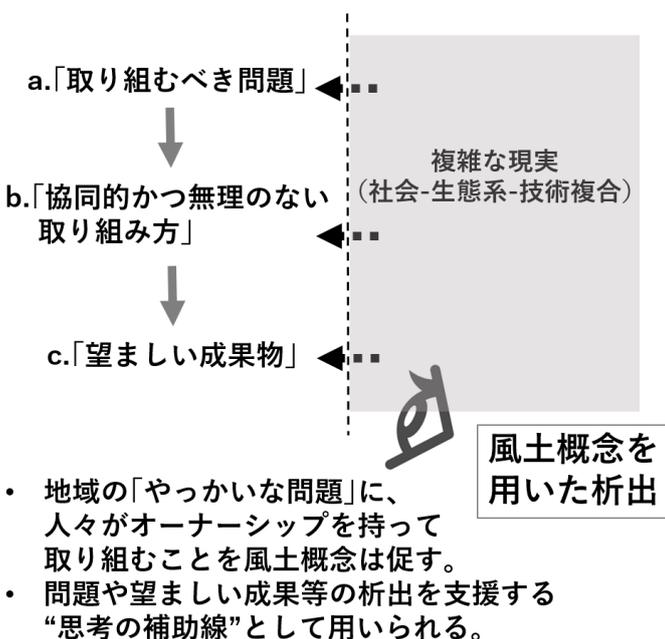
風土は、持続可能な地域計画や資源管理の分野から高い関心を寄せられている概念の一つである。例えば、科研費で実施されている研究課題だけを数えても、課題名、キーワード、概要に「風土」と「地域」「持続可能性」「環境保全」を含むものは、久保(2003-2005)、王(2012-2016)をはじめ、のべ100件以上存在する。研究者や行政担当者のあいだでは、環境と持続可能性に配慮した地域づくりにおいて、地域の風土性を知る多様なアクターの参加と連携が必要であること、地域の風土性に即した形での自律と協同のあり方、および資源管理やリスク管理の方法などを尊重すべきことが共有されつつある。また、風土概念と地域の防災の仕組みや被災の記憶、世代間対話などを結びつける新しい視座からの研究も国内外で行われている。

研究代表者はこれまで、先述の王などの風土概念に注目する研究者や実践家へのインタビューと文献調査から、地域研究などの諸分野において風土概念は「やっかいな問題」(wicked problem: Rittel & Webber, 1974)、即ち、課題も解決策も明確ではなく、そもそも何が問題なのかを定義することから始めなければならない問題に、地域の人々がオーナーシップをもって取り組むために用いられる傾向があることを明らかにしてきた。より具体的には、社会-生態系-技術複合としての複雑な現実から、地域の人々が意見交換のなかで「喫緊に取り組むべき問題」、「協同的かつ無理のない取り組み方」、「望ましい成果物」の析出を支援する“思考の補助線”として風土概念が用いられていること、また今後も用いられるであろうことを明らかにした(図1参照)。

しかし、このように多くの場面と文脈において風土概念が用いられている一方、これらの関心と重なるような哲学的・倫理的な風土概念の検討は、桑子(2009-2011)や犬塚(2015-2017)などのごく少数にとどまっており、環境保全や地域づくりに関わる各々の場面での風土概念の用いられ方の特徴や思想的背景は、和辻哲郎やオギュスタン・ベルクらによる定義と考察の枠内で必ずしも用いられていなかった。もちろん、厳格な定義づけが求められるわけではないが、風土概念を用いることで可能となる発見や新しい選択肢の特徴についての共通理解がなければ、風土概念が口当たりのよいバズワードとして消費される懸念があった。

そこで本研究では、【課題①】風土概念を用いた、「取り組むべき問題」、「協同的かつ無理のない取り組み方」、「望ましい成果物」の析出は、資源管理や防災などの分野において実際に

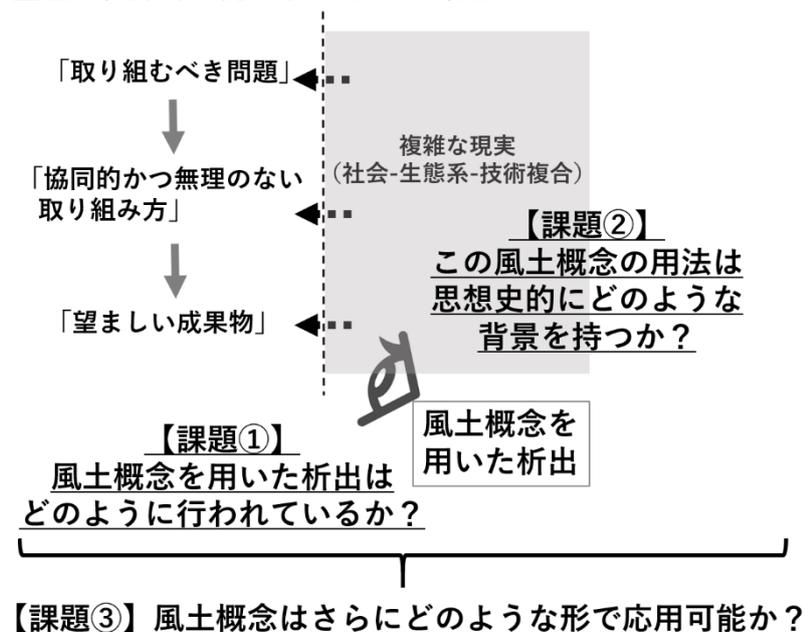
図1: “思考の補助線”としての風土概念



- 地域の「やっかいな問題」に、人々がオーナーシップを持って取り組むことを風土概念は促す。
- 問題や望ましい成果等の析出を支援する“思考の補助線”として用いられる。

のように行われているのか。【課題②】この風土概念の用法は思想史的に、どのような背景を持つか。【課題③】風土概念を用いた地域の課題へのアプローチは、今後さらにもどのような形で応用可能であるか。以上の3つの課題を立てた。(図2参照)

図2: 本研究を構成する3つの課題



2. 研究の目的

▼構築主義的な風土研究、および、持続可能な地域づくりと哲学・倫理学研究との連携強化

本研究は、先述の3つの課題に応えることにより、①住民主体の持続可能な地域づくりにおいて重要な、住環境、資源管理、防災等の分野での風土概念の用法のきめ細かい分析、②思想史的研究を通じた持続可能な地域づくりに関する諸研究と哲学・倫理学分野との連携、③風土概念と社会的信念、資源論、世代間対話等の、食農倫理、環境徳倫理学における鍵概念との関連の検討を通じた、同概念のより広い応用可能性を記述することを目的とした。

これらの目的の独創性は、従来、本質主義的アプローチ(風土とは何か、何が良い風土の要件であるか)が主だった風土研究に対して、構築主義的アプローチ(風土概念を用いることでどのような経験や行為が新しく理解・選択できるようになるのか)を行う点。加えて、本研究は、風土概念の用法の思想史的背景を検討することで、風土研究の構築主義的アプローチを新たに開拓するだけでなく、持続可能な地域づくりと哲学・倫理学研究との連携強化を視野に入れた点にあったといえる。

3. 研究の方法

▼持続可能な地域づくりにおける風土概念の用いられ方・その思想的背景・今後の用いられ方をテーマとしたインタビューと文献調査

上記の研究目的を達成するため、各分野の研究者・実践家へのインタビューと文献研究を行った。国内外の学会での研究発表と質疑応答を含め、インタビューにご協力いただいた研究者・実践者の方のお名前を以下に記す(※敬称略・五十音順。紙幅の都合上、一部のみ記載)。

江口崇(日本酒研究)、王智弘(資源管理論)、大谷通高(フェミニズム)、小野聡(環境政策)、亀山純生(風土論・環境倫理学)、神崎宣次(倫理学)、鬼頭秀一(環境倫理学)、金セッピョル(映像人類学)、熊澤輝一(環境計画論)、栗山はるな(和辻哲郎研究、仏教論)、小崎隆(土壌学)、小林舞(アグロエコロジー)、佐藤麻貴(風土論・気候変動対策) 瀬平劉アントン(教育学・日本思想史)、塩谷賢(哲学)、嶋田奈穂子(宗教学・地域研究)、ジャクソン・トーマス(子どもの哲学)、ジャネル・ロマリク(日本哲学史)、辻梨花(子どもの哲学)、トクマタカシ(デザイナー)、トンプソン・ポール(食農倫理学)、中尾世治(文化人類学)、浜田竜之介(土壌学)、林耕次(文

化人類学・日本酒研究)、深谷有基(キリスト教思想)、藤木篤(工学倫理・STS)、フェルホート、ヨースト(シリアスゲーム研究)、ベルク・オギュスタン(風土学)、マンガス・アストリッド(シリアスゲーム研究)、宮田晃碩(日本哲学史)、村上寛(キリスト教思想)、モロー・ヨアン(生態地理学・災害の記憶)、山極壽一(人類学・生態環境生物学)、吉永明弘(環境倫理学)、ライナ・ドロズ(日本思想史・環境倫理学)、ルプレヒト・クリストフ(地理学・マルチスピーシーズの都市)、和出伸一(デザイナー)

4. 研究成果

【2019年度】

代表的な研究活動は以下のとおり：

- ・ 比較思想学会 2019 年度大会 (6 月 15 日,16 日 石川県西田幾多郎記念哲学館) にて、研究報告を行い、和辻風土論の思想史的位置づけを分析し、地域の持続可能性とレジリエンスの向上に関わる関連分野の研究者と実践者に資する形でその応用可能性に関する意見交換の機会を行った。
- ・ International Association for Japanese Philosophy 2019 (10 月 12 日,13 日 ハワイ大学マノア校) にて、「Fudo theory, Environmental ethics, Food ethics」を報告し、環境倫理学、食農倫理学と風土論の接続についての意見交換の機会を得た。また、Thomas Jackson 氏と和辻風土論における「旅行者の体験」と P4C (こどもの哲学) の関連性についての意見交換を行った。
- ・ Sevilla Anton 氏、Laina Droz 氏、王智弘氏、宮田晃碩氏らとの合宿形式の意見交換会を開催し (10 月 19 日,20 日 地球研)、風土論と教育学、環境倫理学、フィールドワーク、文学研究、表現論との接続の可能性についての意見交換を行った。

意見交換と調査を通じて、地域の持続可能性とレジリエンスの向上に関わる関連分野において「風土」という言葉が用いられる場面では、特に風土性と歴史生の相違点、つまり歴史的事実の直接的な表出ではなく、体感されて顕れる、ある種の痕跡、来歴、出来事の射影であり、そうであるがゆえにある種のゆがみが、単独ではなく、複数につながるかたちで表現されるという点が着目される傾向が明らかとなった。2019 年度は、複数の学会での学会報告と意見交換会を通じて、風土論に関心を持つ研究者・実践者らへの聞き取り調査を実施することができた。この聞き取り調査により、以下の点を確認した。

- (1) 風土論が、超学際研究や持続可能な社会への移行/転換といった取り組みに対して、どのような「レンズ」や「プリズム」を提供可能であるかを検討することにより——ある観点に立って何かを新しく見出すとき、何かに注意を向ければ、同時に別の何かに注意を向けられないという事態が必然的に生じるが、それが風土論においてはどのような性質のものであるかを明確化することにより——当該分野への理論的貢献を果たしうる。
- (2) 現場で行われている細かい議論をはり合わせていく方法が求められているのであり、流し込むべき鋳型——正しい解決策がある。それは正しい知識を提供する。だから知識を与えれば、みんなしかるべき形になる・行動するという前提に基づいたプログラム——が求められているわけではない。
- (3) 風土として貼りあわされた、ビジョン、アイデンティティは、全体的な計画・理論 (完結した全体の記述としての理論) を決めるためのものではなく、計画・理論に巻き込まれる参加者を”結果として”間接的な共作者にするためのフィードバックとしてある。

【2020 年度】

代表的な研究活動は以下のとおり：

- Thompson, P. B. (2015). *From field to fork: Food ethics for everyone*. Oxford University Press. の邦訳を行った（邦題『食農倫理学の長い旅：〈食べる〉のどこに倫理はあるのか』、勁草書房）。トンプソンは本書において特にフードシステムをめぐる諸問題に着目し、倫理学者が、それぞれの国や地域が抱えている問題の種類や質、利害関係者の違い、歴史的経緯、生態学的制約などを軽視し、問題の過度の単純化や抽象化を行えば、対立を悪化させかねないことを指摘している。本書の邦訳を通じて、地域計画において倫理学が果たすことが期待されている役割と陥穽についての、具体的なケーススタディを国内に紹介することができた。
- 日本土壌肥料学会 2020 年度大会（9 月 8 日、オンライン）にて、「人新世における土壌をめぐるナラティブの諸相：地域のレジリエンスの向上と関連して」を報告し、比較的安定した気候のなかで創造的な未来を打ち立てることが難しいかもしれない「人新世」(Anthropocene)において、地域計画のなかで社会・生態系の「レジリエンス」(resilience: 回復力、弾性)の向上に取り組むことが今後ますます重要となることが予測されることを報告し、意見交換を行った。
- Asia Pacific Society for Agricultural and Food Ethics 4th Conference(第 4 回食農倫理学会議：APSAFE2020)を 12 月 3 日から 16 日にかけて、オンラインで開催した。前述のトンプソンをはじめとするゲストスピーカーをはじめ、50 名ほどが参加し、食を中心として地域の、そして世界の持続可能性の向上に向けた取り組みへの倫理学の貢献のあり方についての意見交換の場を設けた。

2020 年度は、複数の学会での学会報告と意見交換会を通じて、風土論に関心を持つ研究者・実践者のみならず、特にフードシステムをはじめとする学際的な場で活躍する研究者・実践者らへの聞き取り調査を実施することができた。この聞き取り調査により、以下の点を確認した。

- (1) 地域計画の立案において、グローバルな問題関心をどのようにローカルな問題関心と接続するかは、学術分野・実践の種類を越えて共通する論点である。地理的・社会的不均一さや、世代的・性別等で異なる問題関心を、グローバルな問題関心のもとで見落とすことなく、術語の濫用やある手法の過剰評価などで問題が現実から乖離し、取り組みが自閉化する陥穽をどう避けるかについて、大きな関心がもたれている。
- (2) 風土論に求められるのは、"正しい解決策"ではなく、現場で行われている細かい議論をより合わせていく際の可視化の方法である。和辻の行った風土の類型化はその一例といえる。「思考に補助線を引く」とは、明確化されていないが可能な関係を見て取れるようにすることであり、ありうる可能性を実現させるにあたり、どのような素材を持ってくるか、どのように実際に組み合わせるかを検討する場を作ることである。風土の言及という仕方での可視化は、特に以下を可能にすることが期待される：①制御可能な単位を括りだし、②現にあることとは他の可能性、現実とは両立しないものを議論の対象にし、③ある取り組みについての、複数の・ときには矛盾する評価軸の併存を検討する。
- (3) その地域の風土としてひとまず貼りあわされた、ビジョン、アイデンティティは、"正解"を示す道筋ではなく、計画・理論に巻き込まれる参加者を間接的に共作者にするための媒体として位置づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Joost Vervoort, Astrid Mangnus, Steven McGreevy, Kazuhiko Ota, Kyle Thompson, Christoph Rupperecht, Norie Tamura, Carien Moosdorff, Max Spiegelberg, Mai Kobayashi	4. 巻 11
2. 論文標題 Unlocking the potential of gaming for anticipatory governance	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Earth System Governance	6. 最初と最後の頁 100130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.esg.2021.100130	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 マックグリービー スティーブンR, 田村 典江, ルプレヒト クリストフD. D, 太田 和彦, 小林 舞, スピーゲルバーグ, マキシミアン	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 未来を知り、遊び、実験する：ソフトシナリオ手法を通じたフードポリシーの共創	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境科学会誌	6. 最初と最後の頁 46-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦	4. 巻 15
2. 論文標題 持続可能な都市のための食の再地域化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生社会システム研究	6. 最初と最後の頁 139-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦	4. 巻 46
2. 論文標題 レジリエンス研究における和辻風土論の寄与：生の哲学との比較と「旅行者の体験における弁証法」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 109-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦	4. 巻 5月号
2. 論文標題 人新世という物語：新たな地質年代、一つの地球、いくつもの世界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦	4. 巻 45
2. 論文標題 批判的コスモポリタニズムと風土論 和辻哲郎とアルフレート・シュッツ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 73-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦, 河野真貴子, 寺本剛, 前川智美	4. 巻 90(3)
2. 論文標題 土壌倫理の射程：食と農、リスク、未来世代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本土壌肥科学雑誌	6. 最初と最後の頁 403-408
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田和彦, 立川雅司	4. 巻 13
2. 論文標題 持続可能なフードシステムの構築に向けた多様な当事者の関与の促進：「食に関わることの市民性」の概念分析と使用傾向について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共生社会システム研究	6. 最初と最後の頁 141-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Astrid C. Mangnus, Joost M. Vervoort, Steven R. McGreevy, Kazuhiko Ota, Christoph D. D. Rupprecht, Momoe Oga, Mai Kobayashi	4. 巻 24(4)
2. 論文標題 New pathways for governing food system transformations: a pluralistic practice-based futures approach using visioning, back-casting, and serious gaming	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Ecology and Society	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5751/ES-11014-240402	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 太田和彦, 谷口吉光	4. 巻 12
2. 論文標題 食分野における持続可能な社会への転換のための学習プログラムの試み: 秋田県立能代松陽高校における実践事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境思想・教育研究	6. 最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件(うち招待講演 5件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 「翻訳装置としてのループリック」の活用に向けて
3. 学会等名 人間文化研究機構 可視化高度化事業「映像とループリック」第2回研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 土壌を通して話しはじめるための8つの入り口: 環境思想の応用と実践
3. 学会等名 2021年度日本土壌肥料学会関西支部大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 「人新世のなかの土壌」の位置づけに関する近年の研究動向：学際的連携の促進と「土壌とともに考える」という方向性について
3. 学会等名 2021年度日本土壌肥料学会関西支部大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 土について話し始めるための4つの入り口
3. 学会等名 日本学術会議 環境思想・環境教育分科会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 風土論の隣接分野ならびに、和辻哲郎の二次文献の整理
3. 学会等名 共生社会システム学会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 超学際的な連携・協働におけるコミュニケーション・ツールとしてのルーブリックの可能性
3. 学会等名 人間文化研究機構 可視化高度化事業「映像とルーブリック」第1回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 フードスケープをつなぐ：望ましい食について論じる場を作る一手法
3. 学会等名 南山大学社会倫理研究所「企業・人権・倫理」研究プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuhiko OTA, Tomohiro OH
2. 発表標題 How does milieu connect with the narrative of modern Japanese environmental thought?: Suggestions from literature reviews
3. 学会等名 International Association for Japanese Philosophy 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 食べる のどこに倫理はあるのか？ 食農倫理学の長い旅
3. 学会等名 神戸大学・メタ科学技術研究ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 都市における持続可能性、技術、ウェルビーイング、倫理的諸問題
3. 学会等名 応用哲学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 フードシステムの持続可能性の向上を目指す取り組みへの食農倫理学の寄与の方向性
3. 学会等名 応用哲学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 持続可能なフードシステムに関する学習に 果たすアクティブ・ラーニングの継続的效果
3. 学会等名 環境社会学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota, Akito Inoue, Yuka Fujieda
2. 発表標題 Commons and Serious Games
3. 学会等名 IASC-RIHN Online Workshop (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Serious Board Game Jam: Collaborative Visualization of Social Issues and Scientific Knowledge
3. 学会等名 International Conference on Game Jams, Hackathons, and Game Creation Events (ICGJ 2020), (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 人新世における土壌をめぐるナラティブの諸相：地域のレジリエンスの向上を検討する観点として
3. 学会等名 日本土壌肥料学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 Sustainability transitionを促進するツールとしてのシリアスゲームの有効性と限界
3. 学会等名 日本社会学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Supporting Sustainable Food Systems: Quality Food and Ethical Consumption (Welcome Speech)
3. 学会等名 Asia Pacific Society for Agricultural and Food Ethics Conference 2020 (APSAFE 2020) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 「持続可能な社会」に関わる議論は何を前提としているのか？：超学際研究のなかの哲学・倫理学
3. 学会等名 応用哲学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 善意のあいだを調整すること：食について8つのナラティブからの示唆
3. 学会等名 応用哲学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Through Forks to Fields: Using the Lens of Food Consumption to Design Sustainable Agriculture and Technologies
3. 学会等名 The Society for Philosophy and Technology 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 予測と対処とは別の仕方未来を想像することの正当性 和辻哲郎とアンリ・ベルクソン
3. 学会等名 比較思想学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota, Joost vervoort, Steven McGreevy, Astrid Mangnus, Yukihiro Tsujita, Kazutoshi Iida, Masahiko Murakami, Michitaka Ohtani
2. 発表標題 Co-creating Serious Games for Sustainability Transition: A case study of the Serious Board Game Jam 2018 in Kyoto
3. 学会等名 The Digital Games Research Association 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Fudo theory, Environmental ethics, Food ethics
3. 学会等名 International Association for Japanese Philosophy 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 Sustainability Transition研究と環境社会学研究の相補的活用：「厄介な問題」への理論的貢献
3. 学会等名 環境社会学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Playing with food visions: Using gaming methods to experiment with sustainable food governance and refine future pathways in Japan.
3. 学会等名 Global Research Forum on Sustainable Production and Consumption 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 フードスケープを活用した食に関する情報と知見の学際的統合の実践：「私たちを養っているもの」の可視化を通じた理解の変化
3. 学会等名 共生社会システム学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田和彦
2. 発表標題 日本土壌インベントリーの利活用に向けた制度づくりと土壌図の精度向上を目指して：土壌情報なしの土壌倫理は存在しない
3. 学会等名 日本土壌肥料学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiko Ota
2. 発表標題 Exercise for transdisciplinary collaboration that connects and uses future visions: A case study of the Serious Board Game Jam 2018, 2019 in Kyoto
3. 学会等名 ASU / Future Design / FEAST Workshop on intergenerational futures (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 近藤 康久、大西 秀之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 かがわ出版	5. 総ページ数 230 (担当箇所：7章)
3. 書名 環境問題を解く	

1. 著者名 吉永明弘、寺本剛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 259 (担当箇所：4章、12章)
3. 書名 環境倫理学	

1. 著者名 ポール・B・トンプソン、太田和彦訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 395
3. 書名 食農倫理学の長い旅： 食べる のどこに倫理はあるのか	

1. 著者名 近藤康久、ハイン・マレー	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 208 (担当箇所：10章、11章)
3. 書名 環境問題を 見える化 する	

1. 著者名 Toshiyuki Kaneda, Ryoju Hamada, Terukazu Kumazawa	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 324 (担当箇所：10章)
3. 書名 Simulation and Gaming for Social Design	

1. 著者名 田村典江、クリストフ・D・D・ルプレヒト、スティーブン・R・マックグリービー	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 191
3. 書名 みんなでつくる「いただきます」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【学術貢献活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共生社会システム学会ワークショップ「風土論の近傍、和辻哲郎の遠望」 企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等、査読 太田和彦 2021年9月25日 - 2021年9月26日 ・第4回アジア太平洋圏食農倫理会議(APSAFE2020)の企画・運営 企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等、監修、査読、その他 太田和彦、神崎宣次 2020年12月3日 - 2020年12月16日 ・応用哲学会サマースクール「フードスケープをつなぐ：食と農について学ぶ3日間」 企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等 太田和彦、神崎宣次（総合地球環境学研究所。）2019年9月15日 - 2019年9月17日 ・インターン研修：Annisa Hasanah Apendi Arsyad氏（京都大学地球環境学堂環境教育論分野）の受け入れ、共同研究の実施。 2021年10月1日 - 2022年1月31日 <p>【Webサイト】</p> <p>APSAFE 2020 website https://www.apsafe2020.online/</p> <p>【制作物】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インフォグラフィクス「都市のフードポリシー・スターターキット」 https://www.apsafe2020.org/infographic/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

<p>国際研究集会 Asia Pacific Society for Agricultural and Food Ethics Conference 2020 (APSAFE 2020)</p>	<p>開催年 2020年～2020年</p>
---	----------------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------